

入試企画委員会

平成 29 年度の入試企画委員会は、例年と同様に、当該年度に実施する入学試験について、試験日程を含む基本方針（案）を確認し、3 年次編入学試験の実施、入試判定特別委員会を通じて、一般入試の前期日程および後期日程の合格者判定を行った他、大学入試説明会（7 月）およびオープンキャンパス（7 月・11 月）において、学部入試説明ブースを開設して、進路指導担当教員および進学希望者からの各種質問に対応した。

また、年度計画にしたがって検討を行った主な事項は、以下の通りである。

1. 入試改革に伴う高校訪問の実施

平成 29 年度は 3 学科体制による新たな学部入学試験の初年度にあたる。そのため、新学部新学科の入試広報と学部入試に対する質疑や要望を聴取することを目的に、入試企画委員会独自で前学期に高校訪問を行った。ただし、高校側の負担にならないよう、一部はアドミッション・センターの根崎教員の訪問に随行する形で実施した。訪問した高校は、これまで本学部への入学者の多い次に掲げる上位 15 校である。県北（日立一高）、県央（水戸一高、水戸二高、水戸三高、緑岡高校、水戸桜ノ牧高校、茨城高校、水城高校）、県西（下妻一高）、県南（竹園高校、土浦二高、竜ヶ崎一高、牛久栄進高校、常総学院高校）、鹿行（鉾田一高）。

入試企画委員会として用意した質問事項は、主に、推薦入試について、一般入試（前期日程・後期日程）についての 2 点であり、あわせて、学部改組および入試説明の要望があるかどうかを聴取した。意見聴取の結果、推薦入試については、成績上位校ほど受験の機会が少なく、むしろ一般入試、とりわけ後期日程まで受験機会をもつようにすすめる傾向が強いこと、中堅上位校では、推薦入試の受験をすすめる傾向も強いが、入試科目として従来設けてきた小論文試験の対策と採点基準の不明確さを指摘する声が多かった。

その他、一般入試では、社会科学科で前期日程の個別学力検査で英語を課すことになり、いわゆる「出し切り」型の試験を改めたことに対して好意的な意見がみられた。なお、後期日程の個別学力検査でも小論文（英語および日本語課題）を課しているが、とりわけ英語課題小論文については、推薦入試とは異なって意見が分かれた。中堅上位校では、英語課題小論文をむしろ英語の出題ととらえ、従来までの日本語課題小論文よりも受けやすくなったとの意見が多数を占めた。上位校では、問題に対する評価よりも、配点による逆転可能性を要望する声が多かった。

2. 平成 31 年度に向けた入試改革

新学部設置に際しては、大きな入試改革を実施できなかったこと、平成 32（2021）年度の新テストの導入に向けて、学力の 3 要素を備えた入試改革を行う必要があること、地域

に開かれた大学として、より多様な人材を獲得する必要があることなど、入試改革の大きな動きに対応して、前学期に実施した高校訪問の結果に基づいて、以下の入試制度の改革を行った。

(1) 一般入試の利用教科目と個別学力検査の配点の変更

さらなる志願者の増加を図ることを目的に、現代社会学科において、前期日程のセンター試験の利用教科目を拡大したほか、後期日程における逆転可能性を高め、より上位層の受験機会を与えることを目的として、個別学力検査の配点を3学科とも増加させた。

(2) 新たな推薦入試制度の導入

学力の3要素のうち、とりわけ第3要素である「主体性をもって協働して学ぶ態度」をはかる必要が生じたところから、まず推薦入学試験において、調査書を評価に加えなかった2学科において、新たに調査書を対象に加えるとともに、高校在学時の学業活動との連携をはかり、学科カリキュラムの理解に基礎となる学力を身につけてもらうために、外部検定試験の評価を評価対象に加えることとした。外部検定試験は、新テストで受験が一般化することが予定される英語のほか、各学科のアドミッション・ポリシーにしたがった学科固有の検定科目とした。なお、英語の基礎学力は実用英語検定2級程度とし、受験生の負担にならないように、外部検定試験の受験は出願要件とはしないことにした。

(3) その他

一般入試の個別学力検査のうち、後期日程については、2学科で採用している英語課題小論文に変更を加えるかどうかについて、推薦入試の実施科目とともに検討を行ったが、全学との関係で、改めて学部共通の方針で実施する必要が生じたことにともない、以上の点については次年度以降に改めて検討することとし、今年度はそのための準備を行うことにした。

平成29年度入試企画委員会委員長：古屋等